

2

東京都立川市

ふじようちえん

- クラス数 / 19 クラス
- 幼児数 / 620 名
- 建築主 / 学校法人
みんなのひろは藤幼稚園
- 所在地 / 東京都立川市上砂町 2-7-1

- 敷地面積 / 4,791.69m²
- 建築面積 / 1,419.25m²
- 延床面積 / 1,304.01m²
- 構造・規模 / S造 地上1階建
- 施工期間 / 2006年3月～2006年9月(第1期)
2006年7月～2007年1月(第2期)

※クラス、幼児の数値は平成22年3月末現在
※その他の建物概要については新築園舎の情報

教育方針

- みんなちがってみんないい
- わたしひとりのできるように手伝って
- 理解は驚きに始まる

自分で感じて、気づいて行動に結びつけること。
だから、人も、園舎も、馬も、木も、草も、子どもが育つための道具なのです。

ドーナツ状に楕円形につながった園舎。 その屋上は幼児が走り回る運動場。

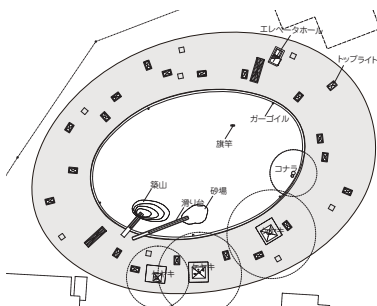
「園舎は巨大な遊具、子どもが育つ道具」というコンセプトを具体化した園舎。中庭と屋上の立体的な回遊性が幼児の体力を向上。子育ての支援の場となるランチルームとカフェを用意するなど地域連携を考慮した空間づくり。



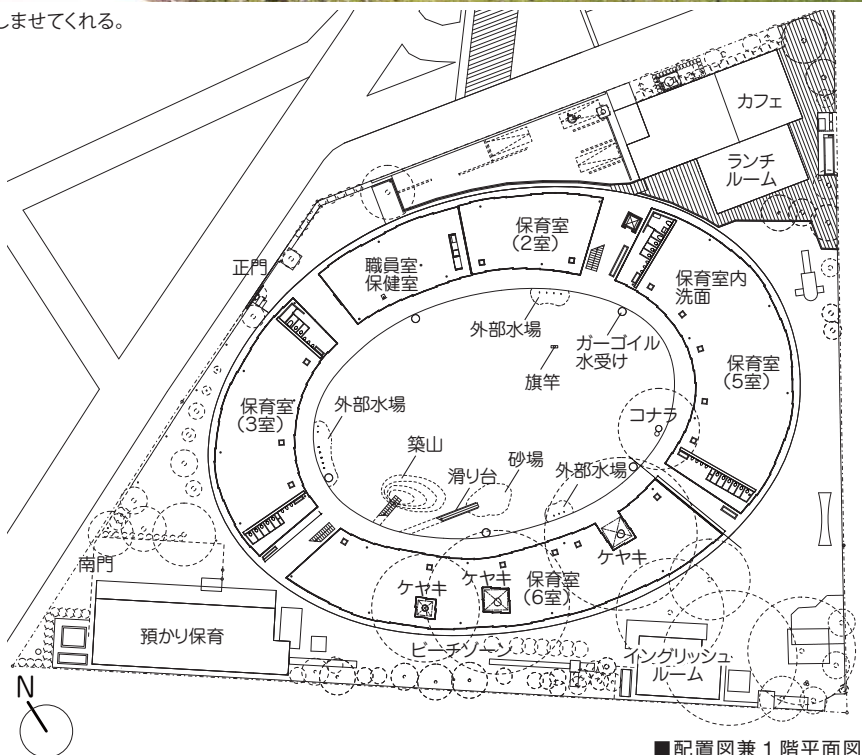
雨の日は雨水が溝のように丸い水受けに落ち、幼児たちを楽しませてくれる。

計画に見られる 指針改訂のポイント

1. 子どもの体力向上のための空間
2. 家庭や地域と連携した施設整備の充実
3. 環境面からの持続可能性への配慮



■屋上階平面図



■配置図兼1階平面図

子どもの体力向上のための空間 ↳ 回遊性のある空間配置



1 屋根を自由にぐるぐる回る幼児



2 木登り、モックを利用した遊び



3 園舎と連結した半屋外テラスで自由に動き回る



4 幼児が中庭と屋上を連結する滑り台で楽しく遊ぶ

園長の視点から

ぐるぐる走って 自分で「選ぶ」

「走れる園舎」が大きな特徴で、調査の結果、サッカーを取り入れている幼稚園より圧倒的に歩数が多い結果となりました。その理由がループ状の屋上です。行き止まりがない回遊性のある施設は、子どもたちのお気に入りの場所で、ぐるぐると遊びながら走り回っています。その中に自然の樹木を活かした遊具や園庭に通じる滑り台など立体的な遊び環境をつくり出し、子どもの

体力向上に自然なかたちで取り組めるように工夫しています。園舎には、木登りのできるケヤキや広い砂場など、様々な要素が準備されています。子どもたちは屋上から園全体を見回しながら、次に遊ぶところを選ぶという「自発的に選ぶ力」を養うことにもつながっているようです。

(写真1～4)

幼稚園全体が活動空間に

1階には屋根の部分が底となった半屋外空間があります。天気の悪い日の子どもた

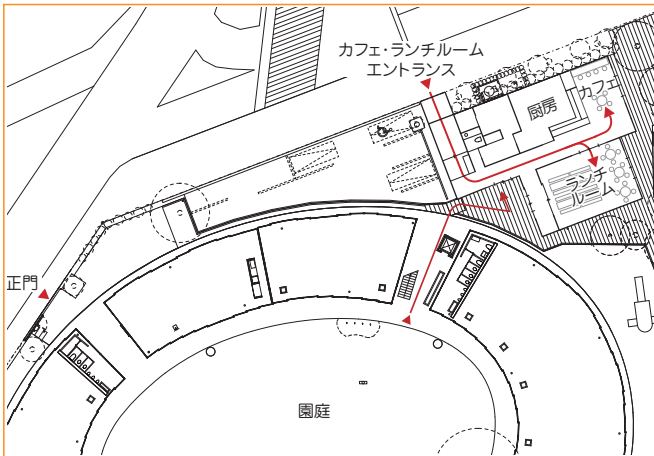
ちの活動の場となるだけでなく、クラスの違う子どもたちの間に交流が生まれています。教職員も歩きながら全体に目を配ることができ、固定の仕切りがあまりないため、仲間はずれができにくい環境となっています。(写真3)

子育ての支援のスペース

子育てを支援する場となるランチルームとカフェを用意しています。園舎を経由せず入ることができ、内部の様子も分かりやすいため、気軽に利用できます。保護者同

家庭や地域と連携した施設整備の充実

「保護者が安心して子どもたちの動きを見守れる環境



5 保護者に開放されているカフェとランチルームは正門以外の専用エントランスからも出入りできる。



7 保護者が園内外から出入り自由なカフェとランチルーム



6 ランチルームでの保護者同士の語らい



8 保護者が一息つける憩いのカフェ

士が会話を通じて、子育ての悩みに対して経験を共有したり、地域の子育てネットワークづくりを行う場として活用され、保護者からも好評です。(図5、写真6～8)

親子のコミュニケーションの支援

ランチルームは、定期的に保護者と幼児と一緒に昼食を食べる機会を設けて、親子のコミュニケーションの場としても活用されています。レストランではなく、「幼稚園で家族と一緒に給食を食べた」という記憶を、将来思い出してもらえようことを目指しています。(写真6)

建具の開放と断熱材の利用による快適環境

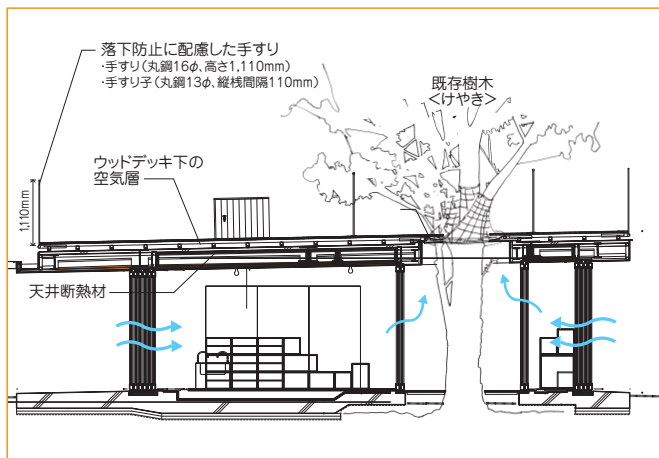
季節に応じて中庭側や外側の引き戸が全て開閉可能となっています。夏でもほとんど空調を使用しません。通常、屋根直下の部屋は夏場、暑くなることが多いのですが、高断熱化することにより、快適な空間を確保しています。なお、引き戸は子どもたちでも安全に、軽い力で開閉できます。木が建物を貫いて生え、風の通る園舎で、子どもたちは自然を肌を感じながら生活することができます。(図9、写真10、11)

〈設計者の視点から〉

◎室内には基本的に間仕切り壁が一切ありません。当初、保育室の間には壁が必要だと検討しましたが、「家具になるような箱を積んで緩やかに区切りましょう」という提案で実現しました。積んだ箱は、ロッカー、本棚、道具入れとして使用しています。可動間仕切りなので、イベント時などには、広いスペースをつくり、家具を積み重ねてステージにすることもできます。(写真10)

◎楕円形の園舎の屋上を走れるように

環境面からの持続可能性への配慮 └ 空気層を利用した快適な室内環境



9 ウッドデッキ下の空気層と天井断熱材により、夏季の室内の温度上昇を低減。自然換気にも配慮している



11 既存樹木を活かした園舎



10 開け放つことのできる保育室

● 検討委員会委員の視点から

子どもの体力向上のための 観点から

幼児の興味や関心が屋外に向き、また、伸び伸びと体を動かして遊べる、回遊性のある空間が確保されており、幼児の身体的な発達を促すことができている。また、軒下にも広々とした回遊性のある空間を確保することで、そこを回りながら、幼児同士、互いの活動の様子をみることができている計画となっている。

家庭や地域と連携した施設整備 の充実の観点から

保護者同士、保護者と教職員が子育て相談や子育てサークル活動を行える空間が用意されている。お洒落なカフェのような内装で、内部の様子も分かりやすく、保護者が立ち寄りやすい雰囲気となっている。

して、幼児の運動能力を向上させ、さらに園庭と滑り台でつなげることにより、活動の場を立体的にしました。

(写真1、4)

◎幼児が自然とふれあえるように、既存の樹木をそのまま園舎内に活かしています。また屋上スラブに空気層や断熱材を設けることで日中の温度上昇を抑え、引き戸を全開にすれば夏季でも自然通風により快適な室内環境を確保できます。

(写真1～4、10、11、図9)

(設計/手塚建築研究所)